生徒主体の校風

在校生に聞く高高生活

翠巒
Mini Press
第173号
2021/8/20

編集・発行
高崎高校新聞部

SSH生徒

高崎高校は、平成28年から、スーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）に指定されている。SSHでは、自分たちで決めたテーマについて各々が考えを巡らせ研究を進めるため、発想力や創造力を養うことができる。今年から、サイエンス・コミュニケーションⅡが科目として入り、新たな活動として英語でのディベート活動が始まった。

SSH活動に力を入れている清水怜くん（2の1）は、「長い間研究してきた内容を発表するときに最も達成感を感じる。また、日常の事象について抱いた疑問に関して、解決へのサイクルを回していく中で自分なりの答えを得られたときも満足感がある」と言った。

また、ディベート活動について、「基本的に英語で行なわれるので、英語の力はもちろん、内容を瞬時に理解して考える思考力など、多くのことを日々の勉強に活かせる。他にも、今後さらに複雑化していく情報社会で、様々な情報に対して批判的かつ論理的に考えられる能力を身に付けるのに役立つと思う」と話した。（秋山）

SSH活動の様子

応援部

高崎高校には、長い歴史を持つ多くの部活動がある。今年で創部71年を迎える「應援部」は、その中でも固有の精神を受け継ぎ、培ってきた部活動である。

應援部は、現在2年生5人と1年生1人の計6人で活動している。主な活動として、集会時の校歌及び應援歌の指揮、高前定期戦での応援、野球部を始めとする部活動の応援、奉仕活動などを行なっている。また、應援部は、高高生を鼓舞し、活気づける存在である。そのため、より良い演舞を披露できるよう、日頃から翠巒会館で鍛錬を積んでいる。

今年入部した清水惺也くん（1の6）は、應援部の長所について、「やはり、高校生活でも根性というものが必要だ。テスト勉強も受検勉強も根性がないと続かない。應援部なら不屈の精神を身に付けられる。それが良い所だと思う」と話した。その上で、今後の意気込みを、「1年生の部員は自分だけだが、應援部は、学校全体を盛り上げるためにある。1人だろうと全力を尽くすのみだ」と語った。（秋山）

応援練習に励む清水君

一年生に聞く！ 高高の実情

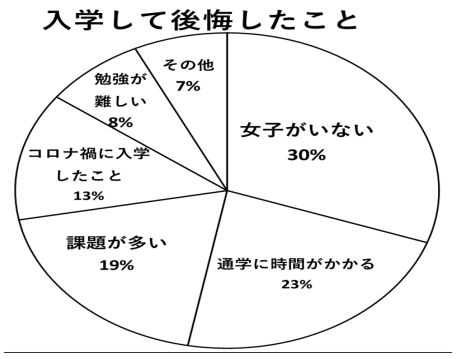
7月12日から16日の5日間、高崎高校の1年生を対象にアンケートを行なった。入学後の感想や、受験勉強に関する質問をした。

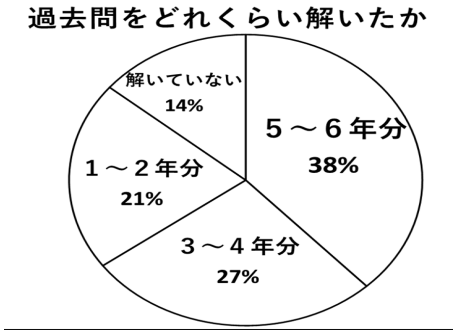
1問目は、「高崎高校に入学して楽しかったことは何か」だ。この質問では、「翠巒祭などの学校行事を体験できたこと」という回答が最も多かった。また、「女子がいないため、気兼ねなく会話ができる」という男子校ならではの回答も多数見られた。他には、「図書室で定期的にレコード鑑賞があること」や「中学校よりも自由度が高く友達との絆を深めやすいこと」といった回答も寄せられた。

2問目は、「高崎高校に入学して後悔したことは何か」だ。この質問に対しての回答は、「女子がいない」というものが群を抜いて多かった。（図1）また、「定期考査が難しい」や「更衣室がないため、プールでの着替えが大変だ」といった回答もあった。

最後に、「群馬県公立高校入試の過去問を何年分解いたのか」と質問した。これには「5～6年分解いた」と答える人が最も多く見られた。（図2）一方で、少数ではあるが、「一切解いていない」と答えた人もいた。

他にも、多種多様な意見が寄せられた。高高生が日々抱いている気持ちが明らかになったアンケートだった。（竹上）





後期首席

右のアンケートに際して、令和2年度後期選抜において首席で合格した相田智洋くん（1の2）にインタビューを行なった。

まず、アンケートの質問をした。1問目の「高高に入って楽しかったこと」に対しては、「翠巒祭や定期戦といった行事が多いことだ。」と語った。2問目の「高高に入って後悔したことは何か」に対しては、「はっきり言って女子がいないことだ。想像していたよりもつらいです。」と苦笑いを浮かべながら語った。次に、「平日の勉強時間は3～4時間程度だった。」と1日の勉強時間について回答をした。他には、「とにかく高高に受かりたいと思い続けることが大切である。この思いが勉強をする意欲になった」と受検勉強に対する心構えを語った。また、「受検期に後悔したことは、苦手教科である国語に時間を割きすぎたことだ。これにより、本番で得意教科であった社会の点数を思うように取れなかった」と受検期の失敗を語った。

最後に、「とにかく後悔の無い選択をして欲しい。来年の春、高高で皆さんとお会いできることを期待している」と中学3年にエールを送った。（竹上）

NOTE

みなさんは鉄道の軌道、つまりレールを意識的に見たことがあるだろうか。例外はあるものの、日本の在来線では、主に軌道の幅の狭い狭軌（1067㎜）が用いられている。しかし、世界的に見ると狭軌を用いている国は少数であり、欧米諸国は標準軌（1435㎜）を用いている▼日本の鉄道に狭軌を導入することを決めたのは大隈重信である。狭軌はコストがかからない反面、曲線通過速度や輸送力不足などが問題であることから、大隈は後に「日本の鉄道を狭軌にしたのは一世一代の不覚」と嘆いた▼確かに日本の鉄道に狭軌を導入したのは失敗かもしれない。しかし、狭軌を導入したからこそ、日本の技術力は向上した。曲線での遠心力を減らし、乗り心地を良くするために車両を傾ける車体傾斜装置は良い例だろう。輸送力不足に関しては、車両の幅を広くする拡幅車体などの技術によってカバーされている。このように、不利な状況が新幹線のような世界初の高速鉄道を生む力となったのである。狭軌という大きなハンディキャップを抱えているが、日本の鉄道は世界でもトップクラスなのだ▼高高のオープンスクールに参加したみなさんも他の人に劣っていると思うことがあるかもしれない。しかし、劣っている部分があるからこそ、成長することができるのではないのだろうか。これから先、受検勉強は本格的になる。厳しい戦いになると思うが、諦めずに高高を目指してほしい。（畑）

紙面割　表・宮前　裏・横塚

高高の誇らしき伝統
翠巒祭

みなさんは高高の文化祭「翠巒祭」についてどれほどご存知だろうか。翠巒祭は、来年で70周年を迎える伝統ある文化祭である。来場者が一万人を超える年も多く、特に２０１４年には過去最多の一万六千人超を記録した。しかし、今年の翠巒祭は、新型コロナウイルス（以下、コロナ）の影響により無観客の中で行なわれた。

翠巒祭の実行委員会は、人事課、広報課、ＷＥＢ課、バス課、グッズ課、交通警備課、放送課、清掃課、履物課、美術課、会計課、アーチ班、一般展示班、食堂喫茶店班、壁画班、ポスター・パンフレット班、模擬店班、イベント班、体育館行事班、フォトモザイク班、夜祭班、装飾課といった22もの班課で構成されている。そのなかでも、アーチ班は翠巒祭の「顔」であるアーチを製作し、来場者を惹きつけ、楽しませる班課である。その完成度の高さは県内の新聞が取り上げるほどだ。アーチのモチーフは毎年異なり、今年は伏見稲荷大社だった。過去には、東京駅やアンコールワットなど、モチーフはバラエティに富んでいる。今回は、アーチ班の前チーフの松岡蒼真くん（３の４）と次期チーフの林颯太くん（２の３）に話を聞いた。

松岡くんは、「例年は午後９時までアーチ製作ができたが、コロナの影響で午後７時までに終了しなければならなかったことが大変だった」と今年の翠巒祭準備を振り返った。また、アーチ製作の魅力を、「アーチの設計の時や完成した時に自分の努力が目に見えてわかるところだ。アーチ完成時にこの上ない達成感を感じたからこそ、取り壊す時にアーチ製作が終わってしまった寂しさを感じた」と話した。林くんは、これからの展望について、「先輩たちの伝統を受け継ぎながらも改革を進めていき、沢山の人々の心に残るアーチを作りたい。予算が少ない中でも工夫して良い物を作っていこうと思う」と述べ、「来年の翠巒祭もコロナがどこまで収束するか分からないが臨機応変に対応したい。観客を入れられるなら、例年通り開催し、高高の良き伝統を受け継いでいけるようにする。たとえ無観客になったとしても、今年より更にパワーアップした翠巒祭を開催したい」と来年の翠巒祭への意欲を語った。

翠巒祭の実行委員会には語りつくせない多くの魅力がある。興味を持ったならば来年実行委員会に入ってみてはどうだろうか。（青山）

今年の翠巒祭のアーチ「伏見稲荷大社」

論説
「ピンチ」から「チャンス」へ

本校の明治30年から続く長い歴史と行事の豊富さは県内随一だ。特に、翠巒祭や定期戦といった行事は古くから伝統として受け継がれている。本校が勉強や部活動に力を入れていることはご存知だろうが、それだけでなく本校には生徒の主体性を尊重する校風がある。生徒一人一人が任された仕事を主体的に行なうことで、翠巒祭や定期戦などの行事を盛り上げている。

このように多様な活動に参加できるのも、高高生活の醍醐味である。そんな中、新型コロナウイルスにより昨年の翠巒祭は中止となり、定期戦は分散での開催だった上、今年の翠巒祭も開催が危ぶまれた。しかし、そのような厳しい状況の中でも高高の主体性は大いに発揮された。例えば、感染防止を考慮し、ダンスなどのイベントでは人と人との距離をとったり、無観客により仕事が無くなった履物課などの班課がアーチ班などの大掛かりな仕事をする班課を手伝ったりした。このような努力から、無事翠巒祭を開催することができた。

現在の社会では、主体的に「ピンチ」を「チャンス」に変えようとする意志が乏しいと思われる。「ピンチ」をどうにもならないことだと捉え、そのままにする。または、「ピンチ」を見て見ぬふりをする。このことを繰り返してはいつまで経っても「ピンチ」は「ピンチ」のままだ。しかし、高高生には主体性という武器がある。この武器はコロナ禍という厳しい状況を生きる上で強い味方となるだろう。だからこそ、私たちを取り巻く「ピンチ」に目を向け、工夫を凝らす必要がある。主体性を持ち、「ピンチ」を「チャンス」に変えることが今を生きるカギになる。（横塚）

定期戦
「玉入れ」撃滅前橋へ

毎年秋には、高高と前高対抗の体育競技大会、「高前定期戦（以下、定期戦）」が開催される。定期戦は１９４７年の初開催から今年で75回目という伝統を持つ行事であり、「玉入れ」が競技の一つとなっている。玉入れというと、小学校で行なわれるような平和な競技を想像する人が多いのではないだろうか。しかし、定期戦の「玉入れ」は高高生と前高生の真剣勝負だ。定期戦実行委員の玉入れ班チーフの埴田光希くん（３の５）に詳しい話を聞いた。

埴田くんは定期戦での「玉入れ」について、「参加人数25名で制限時間の30秒以内に入れた個数を競う。普通の玉入れは精度よりも投げる回数を重視し、一度につき１～２個を何回も投げるが、定期戦の『玉入れ』は精度を重視して多い個数で一度に大量得点を狙うものとなっている」と話した。具体的には、「一度に６つの玉を手に重ねて持ち、みんなで一斉に投げることで籠の真上でぶつけて真下に落とす。他にも、投げるときに手首にスナップをかけない、肘を伸ばし切らないで砲丸投げのように無回転を意識した投げ方をする、こういった精度を上げるための作戦を過去の代から脈々と受け継いでいる」と語った。

最後に、「『玉入れ』は例年前高にリードを許してしまう競技だが、今年は本気で前高を倒しに行く。応援よろしくお願いします」と今年の定期戦への意気込みを話した。両校が威信をかけて勝敗を競う定期戦では、玉入れも総合勝利を決めるうえでの重要な要素となる。試合は前高との高度な頭脳戦となるだろう。ぜひ、戦略的なプレーで高高の六年連続総合勝利を呼び込んでほしい。（宮前）

一昨年の玉入れ競技の様子

新聞部紹介
高高での社会勉強

高高では、学芸部においても文武両道を実現している。なかでも新聞部は、県高校新聞コンクールの第２位である「県議会議長賞」を受賞している。

新聞部では、自分たちで取材先を決めて聞きたいことを聞けるなど、自主性を養うことができる。過去には、群馬県知事や小渕優子氏などに話を伺ったことがある。また、文章を書く力を向上させることができる。書きたい記事を書くことができることも魅力のひとつだろう。

さらに、新聞部に入ると先輩がご飯やアイスを奢ってくれたり、数学を教えてくれたりする。優しい先輩たちと楽しく充実した学校生活を送れること間違いなしだ。

高高に入った暁には、新聞部に入ることを勧める。（畑）